
遠い日々への追憶

碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠い日々への追憶

【Nコード】

N3157Q

【作者名】

碧

【あらすじ】

大切な主一家を護るため戦場で死んだ男の来世はなぜだか主だった人の娘であった。
前世の記憶を抱えた主人公は少々（所でなく）風変わりな公爵令嬢へと成長する。

プロローグ

大切な約束をした。

敬愛し、剣を捧げ、守り抜くと決めた方達とした約束。

『必ず戻ります。戻ったら美味しい食べ物と酒を持ってオウカの花を皆で見に行きましょう』

俺はその約束を果たせなかった。

主たる人とその優しい奥方に彼らの間に生まれたご子息。

彼らを護るため戦にでた俺は数えきれない敵を切り伏せそして最期を迎えた。

護り、戦で死んだことに後悔はない。

ただ、心残りがあるならば……。

『必ず帰ってこい』

約束を守れなかったことだ。

そんな心残りのせいだろうか？

死んで輪廻の輪に戻り再び生を受けた俺の転生先は……。

父……前世、主

母……前世、主の奥方

兄・・・前世、主の「子息

そして前世で彼らに忠誠を誓った俺の現世はというと。

「わあ~~~~可愛い~~~~!」

「お前も兄になるのだから妹をしっかりと守るのだぞ」

「はい!」

「あらあら、過保護なお父様とお兄さまですね~~~~?」

俺・・・・・・・・現世、生まれたての公爵令嬢。

そう、なんの因果か俺・・・いや、私は前世の記憶を覚えたまま主だった人の娘として生まれたのだった。

？

ミリアナ・バル・ローテ公爵令嬢。

それが今の私。

鏡に映るのは黒銀の髪に董色の瞳の恐ろしく整った顔の十歳の女の子の困惑した表情。

前世のくすんだ灰色の髪と瞳、世の中全てを呪うような顔した餓鬼の面影は当たり前だが見当たらない。

”俺”が生きた時代からもう五百年が過ぎている。戦場で死んだ一般兵などこの時代には何一つ遺ってはいない。

”私”の記憶の中以外は。

前世の記憶があるからと言って人格も全て一緒なのかと言うと違う。体も性別も環境も違うのだ。いくら前世で男として生きた二十一年間の記憶を持っていてもそれらに全て塗り替えられることはない。

”俺”と”私”は違う人間なのだ。

まあ、鮮明過ぎる記憶が”私”の人格形成及び生活に大きな影響を与えているのは間違いないが。

「ミリ様！！なんて恰好をされているのですか！」
部屋に入ってくるなり乳母が殺人鬼にでも遭遇したかのような顔を
した。

私は鏡から視線を外し自分の恰好を確かめる。

兄さまのお古であるズボンに清潔な上衣。一般的な貴族の服装だ。
どこもおかしくない。

「べつにへんなかつこうじゃないよ。兄さまといっしょ」
胸を張って言ったら乳母に半泣きで怒られた揚句、問答無用で女の
子の服に着替えさせられた。

理不尽な仕打ちだと思う。

？

私は前世で男であり、戦場を生き抜き、最期を迎えた。
剣に生き、剣に死んだと言っていていいだろう。

前世で血を吐きながら研鑽を積んだ剣技は魂にまで刻み込んでいる。
体は覚えておらずとも精神が魂が覚えている。
頭が覚えていることを身体に覚えさせる。

私は模擬刀を持てるようになるや人目を避けつつ日々鍛練に励んでいた。

だが、当然のことながら十の女の子が模擬刀を振り回す姿は異常で見つかれば鬼の形相で追い掛けられた。

・・・ちょうど今のように。

「ミリ・さま！！お待ちなさい！！模擬刀を持ち出してはいけないとあれほど言ったでしょう！」

刺繍の時間を抜け出して鍛練をしていた所を乳母に見つけた私は脇目も振らずに全力で逃げていた。

と、言うか何故あんなに爆走してるのにスカートはめくれないんだ？足だって殆ど上がってないし、はたから見たら淑女らしい振る舞いなのにどうして全力疾走の私に追い付かんばかりの速さで追い掛けて来れる！

「ミリ・さまー！！」

「いゝやゝ！ごめんなさい~~~~」

そしていつものように追いつけずここに負けた私の涙混じりの叫びが庭に響いた。

？

前世、”俺”はこの誰が生んだかわからない、裏路地に捨てられた孤児であつた。

だから家族なんていたことない。主たる人に拾われるまで生きるためならスリでも残飯漁りでもなんでもやった。

正直、主に出会わなければ”俺”はろくな人生を送れなかつた。

敬愛しても仕切れない主が今は自分の実父。

恐れ多いやら歡喜で踊りだしたいやら私の内心は忙しい。

「おとうさま〜！おかえりなさいませ〜！おしごとおつかれさまです！きょうのしょくじはあつさりぱすたですよ！あ、おふるもわいてます！ああ〜それよりもおへやでゆっくりひといきですか？それとも・・・！」

帰つて来られたお父様に猪の如く突撃した私はお父様を見上げながら怒涛の勢いでかいがいしくお世話をする。

そんな私を乳母は窘め、お母様は「あらあら〜ミリ〜つたら本当にお父様が大好きなのね〜」と柔らかな笑みを浮かべていた。

お母様！私はお父様と同じぐらいの尊敬と敬愛を貴女様に抱いておりますよ！

「おかあさまもだいすき〜〜！！！」

きゅ〜〜と抱き着けば「お母様も大好き〜〜！！」と抱きしめ返

してくれる。

「む、私も二人に負けないくらい大好きだぞ？勿論ここにいない息子のこともな！」

お父様の大きな腕が私達を包み込んでくれる。

「だいすき！」「大好きだぞ」と抱きしめ合い笑い合う家族の姿に乳母が呆れたように手を叩いた。

「はいはい。玄関で家族愛の確認はおよしになってくださいな」

乳母の言葉にお父様は私を片腕に抱き上げお母様の肩を抱き寄せる。

「素晴らしい家族と愛を確かめ合うのは食事が終わってからでもいいか」

「おとうさま！きょうのばすたはほんとうにおいしそうなのですよ！わたしたのしみ！」

「ふふ、ミリ・は本当に食いしん坊さんね」

優しい家族。当たり前のように笑い、抱きしめられる優しい時間。

それは当たり前前のようにですごくすごく大切な奇跡なのだ”俺”の記憶が教えてくれる。

私は記憶の中で一人うずくまる灰色の髪の子供を抱きしめるようにお父様の首にしがみついた。

？

たまに前世の記憶が夢に出て来ることがある。
それは断片的で泡のように浮かんでは消えていく。
今夜もまた、私は夢を見る。

誰も知らない。歴史にも記されなかった一人の男の記憶を。

『わたくし、狙った獲物は必ず仕留める主義ですの』

婉然とした笑みを浮かべつつ彼女は容赦なく己の得物を”俺”に向
かってしならせた。

思い出したくもない記憶は鮮やかで余りにも現実味を帯びていた。

そう、顔の側を掠める鞭の音や避け切れずに打たれた痛みだとかあ
の女の微笑いまで克明に夢に出て来て私の心が恐怖感で一杯になる。
艶やかに微笑みながら容赦なく鞭をふるう女。

壁際に追い詰められた”俺”の顎を鞭の柄であげる。美しい、だけ
ど加虐心に満ちた顔が吐息がかかるほど近くに寄せられた。

『さあ、諦めてわたくしと結婚しなさい。即、子作りに励みますわ
よー！』

綺麗な顔して何言ってるんだ。お前は――！！

「『やめんか！』」

夢の中の”俺”と現実の私の台詞が綺麗に重なる。

荒い息を吐きながら私は跳び起きたままの状態でしばし茫然としていた。

「あ、あくむだ・・・」

呻いて頭を抱えた私は暫く動けなかった。

夢見が最悪だったため今日の気分は最低だ。

珍しくぶすつとした顔で黙ってパンを食べる私にお父様もお母様も給仕の使用者達までもが困惑した様子で顔を見合わせていた。

「ミリ・・・？随分とご機嫌斜めなようだが何かあったのかい？」

食後の紅茶を飲みながらお父様が私に尋ねてきた。

不機嫌な顔のまま視線を上げれば心配そうに私を見る顔、顔、顔。

同じテーブルにつく両親は勿論、数人いる使用者ですら判を押したように同じ顔で私を見ていた。

私は周囲の人間にこんな顔をさせるほどの態度を取っていたのか。

羞恥にかられ私は紅茶をソ・サーに置くと顔があげられずに俯いた。

「ミリ・・・？」

優しいお父様の声に促されて恐る恐る顔をあげると優しい両親の微笑みがあった。

「あの、ごめんなさい。すぐくいやでこわいゆめをみたの・・・だれかになにかいやなことされたとかじゃないの。しんぱいさせてごめんなさい」

心からの誠意を込めて私はその場にいる全ての人に頭を下げた。

「顔を上げなさい」

「おとうさま……」

「お前はまだまだ子供なんだから周りの大人にもつと甘えてもいいんだぞ。怖い夢を見た時は遠慮なく私達に泣き付きなさい。添い寝だろうが文句だろうが受け入れる準備が私にはあるぞ」

気付けばすぐ近くに立っていたお父様の大きな手が優しく頭を撫でてくれる。

ウインクなどしながらもつと甘えてもいんだと言ってくれるお父様に私は勢いよく抱き着いた。

「まあ、お父様ばかりミリ・を独り占めしてずるいですわ！わたくしも……あら？」

「奥様！」

ずるい！と口を尖らせながら立ち上がるうとしたお母様が椅子に足を引っかけ、身体がぐらつく。使用人が悲鳴をあげ、私とお父様が慌てて駆け寄る中で。

「ひゃん！」

お母様は顔から地面に倒れた。

一瞬、確かにこの場に流れる時間は止まった。

お母様は夢のように綺麗でとっても優しく、でもお父様のお仕事の補佐までする才女でもあり私の憧れで尊敬する女性だけ……。

「全く、昔からそっかしい所は変わらないな」

そう、お母様は超がつく程鈍く……いや、どじ……いやいや、人より少し、ほんの少しだけ、物にぶつかったり、顔面から転んだり、階段を踏み外したりすることが多い人なのだ。

……前世の、奥様、もよく転んだり、ぶつかったりしていたからこれはもう、魂に刻みつけられているとしか思えない。

奥様に何かある度に主が飛んできて助け起こしていた。

今、涙目で座り込むお母様をお父様が心配そうに抱き起こすように。

そんな二人の姿にふと、前世の二人が重なって見えた。

違う姿、もう、私以外だれも覚えてない遠い昔を精一杯生きた人達。

そして、彼らは忘却を与えられ、新たに生まれた今を生きている。

何故だろう。一瞬だけ一人、置いて行かれた気分になった。

脳裏に戦場に一人立つ灰色の髪の子の悲しい横顔が浮かんで消えた。

？

そわそわ。

「……………」

キョロキョロ。

「……………」

モジモシ。

「……………ミリ・さま。落ち着いてください」

「え？」

乳母の呆れたような声に部屋をウロウロしつつ窓の外をチラチラ気
にしている自分の恰好を直していた私は漸く足を止めた。

「あ、ごめんなさい」

「全く。若さまが久しぶりにご帰宅されるので嬉しいのはわかりま
すが淑女たるもの……………」

「ばしゃのおと！おにいさまがかえってきた！」

「あ、ミリ・さま！！」

何やら言いかけていた乳母をよそに馬車の音を聞き付けた私は部屋

を飛び出した。
着慣れないとつておきのドレスの裾がふわりと翻る。

帰って来た。帰って来た。お兄さまが帰って来た！！

騎士団に入った五つ上のジェイお兄さまと逢うのは実に一年ぶりなのだ。私の浮かれっぷりも仕方ない。

見慣れた廊下を走り、驚いた顔の使用人達の側を走り抜け、玄関ホールが見える階段の上に辿り着くと既にお父さまとお母さまが揃っていた。

嬉しそうなお父さまの陰からちよこんとお兄さまのヒヨコ色の髪が覗いているのを発見するなり私の心が歓喜で踊る。

「……………！！」

それを認識した途端、私は脇目もふらずに全力疾走で階段を駆け降りた。わずかな距離がもどかしくてドレスの裾がめくれるのは無視だ。

「おかえりなさいませ！おにいさま！！」

最後の数段を飛び降りた私は啞然とする一堂の脇を摺り抜け、懐かしいお兄様の胸に飛び込んだ。

頭上から息を飲む心配がしたが久しぶりの再会に気分が昂揚していた私は気付くことなく擦り寄る。

わあ！久しぶりのお兄様だあ！一年前に比べて随分と遅しくなられ

て！私の腕が背中に回らない。

それに……何やらよい香がする。お香かな？爽やかだけどちょっとお兄様のイメージとは違う。

………生まれて十年。前世を合わせればそれ以上の付き合いが囁いた。何かが違うと。

違和感に固まった私の頭上で「くすつ」と笑う気配。と、いうか………声がお兄様じゃない！

慌てて離れようとした私だったが伸ばされた腕にがしりと拘束され、再び腕の中。

あ、あれ？なんで？どうして？

逃がさないといわんばかりに私、抱きしめられちゃっているのですか？

ガチガチに固まったまま、ギギツと顔をあげれば私を拘束する見覚えのない少年の麗しいご尊顔。

歳はお兄様と同じくらい。お兄様より薄い金の髪に濃い柘榴色の瞳をしている。思わず目が奪われるほどの美貌をもつ少年だったが私は全く別の理由で彼から目がはなせない。

なんで？

疑問だけが胸中で盛大に沸き起こる。

なんで、どうして……！

私を捕まえる腕も、姿も声も……性別さえも違っけど……間違っわけない。この少年は！？

目が合った途端、少年が笑う。

艶やかに獲物に狙いを定めた野生の獣の如く獰猛に。

………その笑みに前世の”彼女”の面影を見出だしてしまった私は。

「い、いやあああああー！」

心の底から恐怖した。

？ - 裏

僕の友人であるジェイは変わり者だ。

家柄よし、顔よし、才能あり、将来性十分のモテル要素の塊のような友人だが僕は彼の婚期はかなり遅いと見ている。

理由？それは簡単さ。

「あ、聞いて聞いて！！ミリ - から手紙が来たんだよ - ！」

頬を赤く染めて、ウツトリと妹（十歳）の手紙を抱きしめくるくる歓喜の踊りを披露する妹至上主義男についていける女性はそうないからさ。

「でさあ〜その時のミリ - がもう、殺人的なまでに可愛くて可愛くて〜！」

デヘへと緩みきった笑顔で口を開けばミリ - がミリ - にミリ - は…

……正直、ウザイ。

どれだけ、君、妹が好きなの？

毎日ミリ - を連呼するから興味もないのに彼の妹について詳しくなる。

「はいはい。君の妹が可愛いのは聞き飽きたよ」

「なに？……まさか、うちの可愛い妹を狙っているんじゃないかなろう

な？」

軽く流そうとしたら何故だか無表情、本気の声色で凄んでくる友の将来が少し、不安だ。

まあ、妹のことさえ絡まなければ良い友人である。騎士見習いとして一年が過ぎた頃に迎えた初めての休暇に彼の実家に誘われる程には僕らは友情を深めていた。

……僕が実家を嫌っていると知っているジェイがお節介を焼いた、とも言っけどね。まあ、僕としてもあの場所に帰らなくていいのは助かる。

ジェイの実家に向かう馬車の中で彼の妹と談議に適当な相打ちを返す僕の腕の中に数時間後、一目で惹かれた少女が飛び込んでくることになるとは思ひもしなかった。

幼女趣味はなかったはずなんだけどなあ。

なんて思いつつ案外すんなり自分の気持ちを受け入れた僕を少女が恐る恐る顔をあげる。

董色の綺麗な瞳と視線が絡む。

心が、魂が震えた。

が

少女と目が合うなり恐怖の雄叫びをあげられてしまった。

……なぜ？

これが僕の受難な恋の始まりであった。

？

前世で結んだ縁とは切れないものなのだろうか？

俺は彼女の生まれ変わりと関わるつもりなんて、なかったのに……私は彼と出会ってしまった。

前世でトラウマ級の求婚をして人を追いかけ回し、そして俺が死んだあの戦場に共に立った彼女。

彼女は俺の恐怖の象徴だ。

逢いたくなかった。誰よりも何よりも、姿も知らないあなたに逢わないことを願っていた。

「あはは、こっちにおいで」

「フウウウウー!!」

ノラネコを餌付けする少年の図……ではない。

お兄様の背中にしがみつき威嚇する私に笑顔で手招きする幼女趣味男の図だ！

「怖くない。怖くないからおいで」

「キシヤヤー!!」

「一体なにをしたら人語を忘れるほど警戒されるんだ？」

「違うよ。これは照れだよ。全く照れ屋さんだね。僕のミリは」
爽やか笑顔でさりげなく所有権を主張した少年に私とお兄様が同時に吠えた。

「だれがあ、お前のミリだ！！ミリは俺の天使だあ！」

「フギヤアア！！」

コイツ、昔（前世）から変わってねぇ！ 思わず前世の言葉使いがでた。

なんでだ？なぜ、前世も現世も出会ったその瞬間から私に狙いを定める！

嫌がらせか？人生二回分の盛大なる計画的犯行か！！
よそを見る！調度いい年頃の娘さんは沢山いるぞ！！

狙うなら私以外にしてくれ！！

余りにも予期できぬ出会いと過去をなぞるような展開に人語を忘れるほどのショックを受け、盛大に口喧嘩をするお兄様の背中で唸る私はこの人生でも”彼”と嫌がらせのように関わることになるなんてちつとも知らなかった。

？

男だった前世。”彼女”の度の過ぎた求愛行動その他諸々にウンザリしたし、恐怖した。

だけど、今、女の身で同じことをされたら……想像したら恐怖しか残らない。

こえエー！！男の行き過ぎた求愛行動こわすぎ！

前世は体格や力で勝ってた分何かされても抵抗できるって安心感が心のどっかにあった。

でも、今は……（自分の身体をみる）……ダメだ！！勝てない！
力もあつちが上で年齢だって五歳も違う。

男と女の違いをまざまざと突きつけられた気分だ。
正直、へこむし悔しいし怖い。
彼に本気で捕まえられたら振りほどくことすらできないであろう自分の身体と弱さに。男であった記憶があるから余計に女の……子供
の身体がもどかしく感じる。

強く在りたい。

なのに力強い腕も激しい動けるだけの体力も私は持っていなかった。

「ミリ・は本当に可愛いな。ねえ、僕の子供生まない？」

ガチャン！！

出会って二日目の朝食の席で敵はとんでもない発言で空気を凍りつかせた。

使用人は一様に目を丸くし、お母様は焼きたてのパンの方に気を取られ、お父様は大人の余裕で笑みを深めて息子の友人を見つめ、ソ・セージを食べていたお兄様は反射的に怒鳴ろうとして食べていたソ・セージが器官に入り咳込んだ。

そして私は突然の悪魔の言葉に青ざめた。震えが持っていたスプーンに伝わりカチカチと耳障りな音がしたが止められなかった。

私の中で灰色の髪を掻きむしりながら”俺”が「ありえねえ〜ぜってえにありえねえ〜！！！」と譫言のように繰り返す。

『オ〜〜〜ホホホッ！！』

高笑いしながら見事な鞭捌きで追い掛けてきた”彼女”の顔と目の前で麗しい笑顔を向けてくる”彼”の顔が重なる。

全然違う顔なのにそこに浮かぶのは私を逃がさないという確固たる意思。

「ななななな、にやにを！！」

動揺と恐怖の余り、噛んだ。

「かわいいなあ~~~~」

「ひっ！」

熱い瞳で見るな！甘い顔をするな！

プルプルと震えた私に更に笑みを深める彼。
なぜだ！

救いを求めて私は視線をさ迷わせた。

？

助けを求めてまずお母様を見る。

「うーん！焼きたてクロワッサン、サイコーにおいしい〜〜〜！」

母はパンに夢中でした。

つ、次はお兄様！お兄様なら助けてくれるはず！
期待を込めてお兄様を見れば。

「ぐはっ、なにい……………ゲホゲホゲホッ！！！」

盛大に咳込んで使用人に背中を摩られていた。

い、一家の大黒柱！お父様！

縫るように見れば全てを受け入れる父性溢れる笑顔のお父様。
救世主がいた！！

うるうる感激で目が潤む私にお父様は力強く頷いて下さった。

「ラードン君」

「他人行儀ですよ。フェイって名前で呼んで下さい。お義父さん」

ヒィィィ！？もう、「お義父さん」呼ばわりしてる！！

こいつの中で私の位置付けがどんなことになっているのか恐すぎる。動揺し、青ざめる私をよそにお父様は余裕の笑みで彼のざれ言を受け流す。

「お父様と呼ばれるとは光栄だ。ミリ・に兄が増えたよ。ねえ、ミリ・もそう思うよね」

彼の発言を軽く聞き流した上に実の息子扱いで私への変態求婚すらなきものにされたお父様、流石です。

コクコクと必死に頷く私に一瞬、彼の動きが止まる。言外に却下された彼が見せた動揺らしきものはその一瞬だけで、すぐに噓くさい爽やか笑顔を浮かべた。

「僕は妹がいないからそう言って頂けると嬉しいですよ」

にこにこニッコリ。

幸せそうにクロワッサンを食べるお母様と今だに咳込みから回復しないお兄様を除く三人はお互いに笑い合った。

若干、あたしの笑みは引きつっていたが気にしない！

？

嘘くさい爽やか笑顔を浮かべた彼はヤツパリ油断ならない男でした

……（涙）

にこにことうそ臭い笑顔を浮かべる少年の視線が私の方に向く。
びっく！と見るからに震える私にますます笑みを深めつつ少年はフ
オークにベーコンを刺すと当たり前のように私に差し出す。

こ、これは。

世間様で言う所の「はい、あーん」という甘酸っぱくもどきどきな
甘い行為だと悟り、意識が飛びかけた。

口をあけて魂を飛ばす私に敵はにこにここと笑いながら「妹ができた
らこうやって食べさせてあげるのが夢だったんだ」と言っていたが、
絶対に嘘だ！

策略だ！陰謀だ！よこしまな想いが私には透けて見えている！

「ミリー？」

フォークを差し出したまま「ほら」と笑顔で脅し、いや、促す少年。

い、嫌だと目で訴えても笑顔でごり押しされて撃沈。

あうあうと口を開閉させて涙目で周囲の助けを求めろが……。

「げげげほー！」

「もぐもぐ」

「ぐっ！」

いまだに咳き込む兄に幸せそうに食事を続ける母に「兄妹」発言をしたため口出しできないらしい父。

助け皆無！

「ご飯が冷めちゃうよ？」

「……………」

ええい！ここは腹を括る！戦場で敵に特攻するかのような心境で私は身を乗り出し勢いよく「はい、あーん」を受け入れた。

私は見てない。蕩ける様な瞳で私に恍惚の視線を向ける少年の姿なんて見てない。

前世と現世において一番の苦行とも言える時間を耐え抜き、どうにかこうにかベーターコンを嚙下した。

はぁ……………これで……………おわつ。

「はい。あ〜ん」

「……………」

ですよ。一回で終わらせてくれるほど甘くないですよ！ちくしよー！

甘い甘い笑顔で少年がさかささし出してきたフォークに私は涙を止められなかった。

結局、「兄妹みたいに仲良くしよう」を免罪符にされ食事が終わるまで「あ〜ん」を付き合わされた。させられた。最後の方は膝抱っこまでされた。・・・ってどうかそこまでする兄妹がいるかあ！
！！（超意識）と叫んだがなぜだか実の兄が「いや！おにいちゃんはいっただってミリーを膝抱っこして「あ〜ん」をしたいぞ！！」と馬鹿発言し、「だってさ、はいミリー」「あ〜ん」「とますます奴を付け上がらせた。

お兄様のお馬鹿〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜！！！！！！

その時間は文字とおり悪夢のような時間だった・・・。

食事を終え、速攻に自室に逃げ帰りベットにもぐりこんで私は悪夢の時間の終わりにむせび泣いた。

「ふふ。次の食事が楽しみだな〜〜〜」

食堂においてそんな危険発言がされていたなどちつとも知らず、私は安堵するやら羞恥に転げまわるやらせわしなかった。

？（前書き）

前世の話な上シリアスです。

？

激動に揺れ動いていたあの時代。誰もが何かと戦っていた。それは人それぞれ違う。剣を持たない生きるための戦いもあった。剣を持ち敵と命のやりとりをする戦いもあった。

これは、戦場で戦った者たちの記憶。

後に英断を下した英雄として名を残すことになる男と戦場で命を散らすことになる名もなき男が戦場で対峙していた。

英雄は侵略者として、男は祖国を守る名もなき兵の一人として。時代を動かした男。戦場に散った男。

だが、本当の意味で歴史を動かしたのは……………。

『……………これ、で……………すぐには、うごけ、ねえ、だろ？』

『お前は……………』

交差した剣は一人に数日は動けない傷をそしてもう一人には致命傷を与えていた。

灰色の瞳が満足そうに驚愕で目を見開く男を見つめる。

『へへっ……………これ、で攻め込むのは、遅れる、だろ？』

『おろかな、いくら俺の足を止めようとも戦局は覆らん。貴様の祖国は滅びる。それにこの程度の傷ならせいぜい三日あれば動ける』

男の言葉に灰色の名もなき兵はただ笑う。

『三日、か……。それで、十分だよ。三日もあれば、あの人なら、あの人達なら……。きつと、最良の道を選んでくれる。俺の……。いや、この戦場で散った命全てが生み出した時間、決して、無駄、しない』

言葉を吐くことにごっそりと命が零れていくようだった。それでも兵は言葉をつむぐことをやめない。

文字とおり血を吐きながら兵は命の代わりに想いを伝える。この戦の無益さを一番知りつつも心のまま弾劾することも止めることもできずにいる男の背を押すように。

『あなたは……。いいのか？ほんとうに、このまま、愚王の意のままに、動いて……。戦いを、とめないままで』

『なにを……』

『しがらみ、も立場も、忘れて、心のまま、動いても、いいんじゃないか？迷いを抱えた、まま、壊すより、迷いを吹っ切って守ったほうが、よっぽ、ど楽だぞ』

ごほりと血の塊が兵の口から零れる。膝に力が入らずそのまま倒れていく。だが、その灰色の瞳はしっかりと男を見据えていた。

『男なら、てめえの心のまま、走れ！』

兵の言葉に男の身体が震える。迷いに揺れる瞳を睨みつけながら兵の意識は暗い深遠に落ちていく。音もなにもない永の眠りへと。

『やくそく、まもれなくて、すいません……。』

後は頼みますと呟き、”彼”の意識は途切れた。

記憶が途切れ、夢が消え、そして……同じ記憶を持つ二つの意識が目を覚ました。

「……………夢、か」

幼さを感じさせる声に似つかわしくない重みの籠った呟きに外で控えていた従者が声をかけて来る。それに適当に答えながら部屋の主は小さくため息を零した。

同じ時、同じ記憶を夢に見たのは互いにまだ、幼い子供。

追憶を抱える二人はいまだ、互いの存在を知らない。

『滅』

手紙を開くと真つ先に飛び込んできたのは禍々しい赤いインクで殴り書きのような荒々しい筆遣いで書かれた文字。手紙を透けて裏側からでもその文字は認識できた。

恨み辛み憎悪嫌悪が濃縮されたが如きその一文字手紙に周囲にいた者達がざわめきながら手紙の受取人から一步下がる。

不幸の手紙か？いやいやそんな甘いもんじゃねえぞ、あの手紙。脅迫状？いや殺害予告か？

様々な憶測が飛び交う中それまで固まっていた手紙の受取人がゆっくりと顔を上げる。その顔に浮かぶのは恐怖かそれとも怒りか。固唾を呑む周囲だったが……彼の顔が確認できると同時に周囲はさらに遠ざかっていた。

いまや受取人の周囲はちよつとした結界でも張られたかのように人氣がなくなっていた。

顔を上げた受取人の浮かべていたのは恐怖でも怒りでもなく色気たっぷりのなそれこそ恋人から恋文でももらったかのような蕩ける笑顔顔を浮かべていたからだ。

こわっ！！

ギャラリーの心が今、奇跡の一致を見せた。

周囲を混乱と恐怖のどつぽ叩き落した受取人……フェイ・ラー

ドンはまるで愛おしい人に触れるかのように手紙を懐に納め、上機嫌で食堂を後にした。

鼻歌でも歌いだしそうなその背中を凍りついたギャラリー多数は見送るしかなかった。

「……………結局、あの手紙はなんだったんだ？」

ぼつりと零れた誰かの疑問に答える声はなかった。

『婚姻届』

気色の悪い口説き文句の連なつた分厚い手紙と共に出てきた婚姻届を私は即座に使用不可能なレベルにまで細切れにした挙句、台所にまで走っていき目を丸くする厨房の面々をよそに赤々と燃え盛る竈に放り込んで灰にした。

「よし！」

呪いの書類が灰になつたことを確認した私は再び走つて部屋まで戻る。机の上に便箋と以前趣味で買ひ求めた異国の朱色の墨と筆。筆に荒々しく墨をつけると心に湧き起こる激情のまま筆を動かした。

『滅』

子供に婚姻届なんぞ送りつけてくる変態幼女趣味男は滅びろ！！

！！

悪夢の日々が終わり、ようやくあの変態を追い出せたと思ったら毎日毎日毎日！！！！手紙と共に婚姻届を送りつけやがって！！！！

私は知らなかった。あの男が私の溢れんばかりの拒絶の手紙をまさか満面の笑みで受け取りあまつさえ加工し額縁に入れて部屋に飾っていることを。

「ミリーは照れ屋だなあ」「寂しさの裏返し」だとか勘違いを爆発させているとか手紙を受け取るたびに悶えて喜んでいたりとか。

己の所業がまったく相手に堪えておらず、手紙の返信なんてせずに無視するのが一番無難とはいわれないが反応を示すよりはよっぽど良い方法だったことに私が気づくのはかなり後のことになる。

「へんたいはほろびろおおおおおおお!!!」

こりもせずに送られてくる手紙&婚姻届に憤りと怒りの雄叫びを上げる私に使用人たちは顔を見合わせ、またかと肩を竦ませると各々の仕事に戻っていった。

み、味方なんてほしいわけじゃないもん!!

涙目でいつものように婚姻届を抹消し、呪われそうなほど禍々しい手紙は鍵付きの専用箱の中に嚴重に封印する。

ありとあらゆる場所から取り寄せたお札が貼り付けられた箱はもう、見ているだけでオドロオドロシイ。中身の方がよっぽど恐ろしいけどな!

「あくむだ。ふこうだ。さいあくだ~~~~~!!!」

生まれて性別逆転してそんなもってあつちには記憶なんて全くないのはどうして今世でも「あいつ」のはた迷惑な求婚に振り回されなければならぬの!

そういう星の元に生まれてるからじゃないの~~~~?

心の小人さんが囁く。が、私は認めない。認めないっしたら認めない!!!

頭を抱えてうなる姿が前世の「彼」と全く同じだったりすることを私は知らない。

ああ~~~~私の平穩で幸せ一杯な人生に暗雲が垂れ込めてきた……。

これからの人生に「彼」がいやと言っほど関わってくるであろうことを予想して私は本気で修道女になろうかと悩んだ。

なんで、こつ、物事は自分の思うとおりに進まないのだろうねえ〜。

「はあ……………」

十歳とは思えぬ重く低いため息は様々な感情が込められていた。主に遠くに離れていながら存在感抜群なはた迷惑求婚を繰り返すフェンとかフェンとかフェンとか！が原因なんだけどね……………！！

「ふ、ふふふっはははっ……………はあ……………」

何とか気分を高揚させようとするがどうにもあがらない。

コテンと机に頭を乗せてつい数日前に届いた手紙をペラリと指に掴む。それは王都に住む父方の叔母からの手紙でありそこに書かれている内容が私の気鬱の原因だ。

「はあ……………なんだろう。どうしてだろう。なんで、どうして……………」

関わりたくないのに。出会いたくなんてなかったのに。どうして私たちは出会ってしまったのだろうか。

近日中に私は両親と共に王都に住む叔母を訪ねることになった。それはとても喜ばしいのだけど問題は王都には「彼」がフィルがいることだ。

兄にも連絡は行くから私が王都に来ることをフィルが知る可能性は高い。(いくら隠そうとしてもあの兄はこと妹のことに関しては駄々漏れなことが多い)

また、出会う。

彼に。『彼女』の魂を持つ人に。

胸に走る痛みに泣きたくなかった。

目を瞑れば鮮やかに思い出せる、遠く過ぎ去った日々。優しい思い出も辛く苦しい思い出も全てこの胸の中にある。

『彼女』の最期も私は覚えている。

『彼女』の命の終焉を見届けた『彼』の嘆きと後悔と悲しみも全部全部覚えていてる。

もう、動かない彼女を抱えてただただ『彼』は自問していた。

本当ならこんな血に手を汚すような女じゃなかった。大切に護られ綺麗で優しい世界に生きるはずの女だった。

こんな戦場で、何の地位もない男を庇って殺されるような女じゃなかった！！

幸せに、そう、幸せになれるはずの女だった。自分にさえ、出会わなければきつと、笑って穏やかに伴侶や子供や孫に見取られて人生を全うしていた。

それを、『俺』が奪った。

そう、悟った瞬間狂いそうなほどの後悔が襲った。

『俺』のせいだ。『俺』が殺した！！護ることもできずにただ『彼女』を戦場に死に追いやってしまった。

『う、うああああああああああ！！』

あの日、魂から叫んだ『彼』の慟哭を、『私』だけが知っている。

「だから……………」

記憶が嘆く。出逢ってしまったことに。また、同じことを繰り返すのかと怯えている。

「出会いたく、なかったよ……………きみにだけは関わりたくないよ……………」

『彼』と『私』は違う。また『彼女』と『フィル』も違う。

だけど、どうしようもなく怖い。刻まれた記憶と後悔、嘆きがあまりにも大きかったから。

『俺』が『彼女』の死の原因になってしまったように『私』が『フィル』を死に追いやるような気がして……………。

「こわいよ……………」

隠せない怯えに私は震えた。

違うけど、ありとあらゆることが違うけど……………それでも『彼女』の魂をもつ『彼』と関わることはとてつもなく、怖かった。

消えてしまった一幕

生まれる。

命が。

いつか、誰かだった命。違う誰かとして生まれる命。

数多の命の中でたった一握りだけいる選ばれた者。

追憶を抱えた命。忘れ去れない想いをその魂に刻む者。

男はにいと笑う。

その笑みは慈愛であり狂気。

相反するそれを何の違和感もなく宿す男は何かを迎えるように腕を広げた。

さあ、見つけようではないか。同胞にして子にしてそして苦しみを抱え生きる「追憶者」達を。

たった一つ彼の苦しみの断片を知りえる存在を。

この手の中へ。

「さあ、どこにいるんだい？隠れても無駄だよ」

どこにいてもどんな姿をしていても彼にはわかる。

「彼ら」と「彼」は惹かれあい出会う定めなのだから。

否定しようとも拒否しようともそれは絶対の摂理。逃げられない。

謳うように声高に宣言するように彼は狂気を乗せて囁く。まだみぬ
「彼ら」に。

「わたしは必ず「君」を見つけるよ」

響く哄笑を小さな数多の瞬きを抱えた闇だけが知っていた。

『その力はきつと……君から安らぎを奪う。僕らは人間だ。何
度でも言う。人間なんだよ。百年持たない脆弱な身体と心を持った
ね。強固な意思も強き理想も……繰り返される時間の中できつと
崩れ落ち、君を支えきれなくなる。僕はね、支えを無くした後、君
がどうなるのかが、その結果、「これ」がどうなるのか、とても怖
い』

途切れ、薄れ、流され、それでもその身に微かに残る懐かしい声。

ただどその声も言葉ももう、遠すぎる。

それを言ったのは、だれ？そしてそれに答えたのは……？

カラカラと馬車が走る音に耳を澄ましながら私はぶつすとした顔を隠せない。

私は今、お母様、お父様と一緒に王都へ向かう馬車の中にいた。

「全く、あいつはいつもこちらを驚かす」

お父様は呆れたような、戸惑うような複雑な感情を込めたため息をつく。

「あらあら、でもおめでたいことですね。寒ぎ込んでいたあの子がやっと前を向いたのですから」

お母様はにこにここと楽しそうに手を叩いている。

「まあ、そうだな。……あれからもう、五年経つのだからな。もうあいつも未来を見つめてもいい頃だ」

「ええ」

ほのぼのと微笑みあう万年新婚夫婦。……子供の前で堂々と口付けを交わすのはおやめください。目のやり場に困ります。こちらら普通の十歳よりも精神が発達しているので非常に居た溜まれないのですが。

なにこれ？両親のラブラブをなぜに見せ付けられなければならないの？

「あの……おとうさま？おかあさま……」

「あなた……」

「ふっ……おまえは可愛いらしいな……」

「そんな、あなたこそ格好良すぎで惚れ直してしまいますわ」

駄目だ！周囲なんぞ目に入らないほど二人の世界になっちゃってる

！！

イチャイチャラブラブうふふあははは。馬車の中はピンクな空気色。

正直に言おう。辛い。いたたまれない。はずかしいiiiiiiiiiiii
！！

目的地に着くまでこの苦行は続いた……。耐え切った私はとても偉いと思う！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3157q/>

遠い日々への追憶

2011年10月26日11時06分発行